

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

博物館から始まる「手学問のすゝめ」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広瀬, 浩二郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009089

博物館から始まる「手学問のすゝめ」

国立民族学博物館准教授 広瀬浩二郎

吹田市立博物館の「さわる－五感の挑戦」展（2006～10年）では、ミュージアムの収蔵品、モノの魅力を触覚（全身）で味わう意義について実践的研究を積み重ねてきた。“さわる”行為そのものの広さと深さ、および自ら手を動かして能動的に情報を得る大切さを実証できたことが、過去5年間の実験展示の最大の成果だったといえよう。今回の特別展「さわる－みんなで楽しむ博物館」で僕が期待するのは、「見ないでさわる」「見てさわる」「さわって見る」など、来館者がさまざまな鑑賞法を試みることである。そこからユニバーサルな“さわる”展示の具体像が浮かび上がってくるに違いない。

従来の博物館において行なわれてきたハンズ・オン展示（さわって学ぶ、さわって楽しむ）の発想を乗り越える新たな理念として、僕は「手学問」（さわって^{おどろ}愕く）を提案したい。「手学問」とは人間の身体に眠る触覚の潜在能力、感覚の多様性を掘り起こす壮大な実験であり、視覚偏重の近代文明に強烈なインパクト（^{おどろ}愕き）を与えることをめざしている。僕が考える「手学問」の眼目は、以下の三つに整理できる。吹田市立博物館の“さわる”展示がきっかけと

なり、下記三つの手法を切り口として、各方面で「手学問」の可能性にアプローチする仲間が増えることを願っている。

①「質感にタッチ」（見ないでさわる）：触覚情報に集中するために^{しゃへい}遮蔽展示（ブラックボックス）を用いる。「視覚を使えない不自由」ではなく「視覚を使わない自由」を実体験する。単純な形の資料で材料の違いを楽しめるモノを選ぶ（土器、箆、衣服など）。

②「機能にタッチ」（見てさわる）：資料を取り出すことができる透明なボックスを用いる。「見るだけではわからないこと」「さわると、より深く理解できること」を提示し、視覚の危うさと触覚の豊かさへの気づきを促す（楽器、装身具、生活道具など）。

③「形状にタッチ」（さわって見る）：博物館の常設展示場にある巨大な資料のミニチュアを用いる。じっくり触察して、資料各部の形体（プロポーション）、あるいは裏面や天井部分など（見落とされがちな情報）を確かめる。その上で展示場にある実物を時間をかけて見る（時にはさわる）ことを奨励し、多様な角度からモノを「みる」おもしろさを紹介する（仏像、乗り物、住居模型など）。

さわる宇宙へ

広瀬浩二郎

Various hands to imagine, to create and to communicate

考える手は力強い

つるつる・ざらざら 熱く・冷たく 重く・軽く 固く・柔らかく

自分の意思で手を動かし広げていく世界の豊かさ

じっくり、ゆっくりさわって身体で感じるもののおもしろさ

手で考える人は僕たちの明日を力強く切り開く

つくる手は優しい

したたかに・しなやかに 大きく・小さく 短く・長たく・細く

指先で知る二次元、手のひらで知る三次元、そして全身で知る四次元

点から線、面から立体、さらに時空を超えて

手でつくる人は僕たちを優しく想像と創造の旅へといざなう

伝える手は温かい

ときどき・はらはら 強く・弱く 激しく・緩やかに 動いて・止まって

手を重ね、手を合わせ、手を握る

音にさわる、絵にさわる、心にさわる

手で伝える人は僕たちのコミュニケーション（ふれあい）

を温かく包み込む

力強い手、優しい手、温かい手

そんなみんなの手をつないで大きな輪（和）にしよう

手さぐりを手ごたえに！

